

## ◆担い手育成事業

# 活力ある漁村づくりモデル育成事業への取り組み

八重山農林水産振興センター 牧野清人

### 1. 目的

平成21年度より小浜島細崎集落において、水産庁の補助事業である活力ある漁村づくりモデル育成事業を活用した漁村活性化の取り組みが行われている。主体は細崎集落の漁業者14名を中心とした「細崎ま〜る新鮮隊」のメンバーで、主に小浜島に訪れる年間15万人以上の観光客を相手とした地元水産物の販促活動等を展開し、漁村の活性化につなげることを目的としている。八重山地区の普及指導員としては、これに関して既存の水産技術指導や情報提供を行うと共に水産海洋研究センター石垣支所等の協力を得ながら同事業の支援を行うこととした。

### 2. 材料及び方法

同事業の実施に関して、年に3回ほど開催される地域戦略会議に出席し、事業計画等について話し合いを行った。また、細崎ま〜る新鮮隊の観光客や小中学生を対象としたモニターツアー等の活動に積極的に参加すると共にさまざまな助言を行った。さらに、水産海洋研究センター石垣支所等の協力によりシャコガイ養殖、観光利用について講義を行うとともに、シャコガイ放流技術について指導を行った。

### 3. 結果及び考察

#### 1) 地域戦略協議会

6月21日に小浜島細崎公民館にて、活力ある漁村づくりモデル育成事業第1回地域戦略協議会が開催され、22年度は昨年度の成果を元に地元活性化を目標とし、水産物をメインとした加工品づくりやブルーツーリズムを重視した事業内容としてゆくこととなった。また、7月29日に石垣市の海人館にて、活力ある漁村づくりモ

デル育成事業第2回地域戦略協議会が開催された。細崎ま〜る新鮮隊隊長をはじめとする隊員その他、竹富町担当者を交えて今年度事業におけるスケジュールについて検討を行ったところ、ブルーツーリズムや漁業体験学習のデモンストラクションを行う他、小浜島内のホテルや飲食店などに対し、地元の魚についてのニーズ調査、千葉県にて先進地研修、県外大学生への体験漁業モニターツアー、10月に開催される世界海垣サミット参加、学校給食への食材提供、加工品開発等を随時行ってゆくこととした。

#### 2) ブルーツーリズム、体験漁業

8月13日に小浜島細崎において、大人子供あわせて8名の観光客に対し、ブルーツーリズムと漁業体験のモニタリングを行った。地元漁業者の漁船にて細崎漁港を出発し、シュノーケリングによる珊瑚礁の観察とグルクンのさびき釣りによる漁業体験を行った。天気もよく波もなく安全であったことと、監視する大人が多かったため問題なく行われ、子供も大人も非常に楽しんでしたが、安全面やツアーの内容等について課題が残った。また、小浜島周囲には大小30箇所近くの魚垣跡が存在しており、これをツーリズムに生かすことができるかを確かめることを目的とし、細崎南側にある魚垣に行き現地調査し、観光ツアーを行うのにどういったやり方がよいかについて検討した。

10月26日に小浜島細崎において、本土の大学生（社会人学生）6名を対象とし、ブルーツーリズムとたらしあげ料理体験のモニタリングを行った。細崎ま〜る新鮮隊の比嘉隊長並びに大城副隊長の案内で細崎漁港周辺にある定置網やカゴ網を見せ、参加者に説明し、漁港で30分程度の釣りをを行い地元の魚の紹介をした。その後

漁港近くの大城副隊長宅敷地内の仮加工場にてたらしあげ料理講習を行った。原材料としてはニザダイやイスズミ等、現地で水揚げされる魚のみを用い、ミンチ機ですり身にし、手作業でこね、プレーンの他、ヒトエグサやハマゴボウ等を混ぜて高温の油で揚げるといった工程であった。その後食事に合わせて全員で試食しながらスライドショーにより地元漁業の説明をし、今回のモニタリングにおいての感想についてアンケート調査を行った。内容としては全員が満足していたようであったが、年齢層によっては多少気を配ってもらいたいとの意見もあった。モニタリング終了後の反省会では、主に料理体験学習の内容について話し合ったが、準備や段取り、大人数になった場合の講習のやり方など、マニュアル化すべきとの意見、事務担当を置いて受付や会計、宣伝関係についての業務について整備すべきとの意見でまとまった。その一方、効率化ばかりに気をとられずに、お客さんを相手にする場合はゆとりを持って楽しんでもらうことが大事ということも再確認できた。

### 3) 世界海垣サミット参加

10月30日、31日に世界海垣サミットが白保で開催された。海外6カ国（フランス、スペイン、ミクロネシア連邦、フィリピン、韓国、台湾）、九州3県（大分、長崎、鹿児島）、沖縄からは白保と小浜島（宮古は不参加）の11地域から海垣（石千見、魚垣とも言う）の復元に取り組む人達が参加した。この中で小浜島で水産庁事業により海産物新製品の開発や体験漁業に取り組む「細崎ま〜る新鮮隊」隊長の比嘉氏の発表を指導した。

### 4) 水産庁との意見交換会

11月29日に小浜島細崎にて、水産庁担当ならびに高知大学受田副学長による地域振興に関する説明ならびに細崎ま〜る新鮮隊との意見交換が行われた。ま〜る新鮮隊隊長より昨年度から今年度にかけての事業報告がなされ、次いで地域一体で一次産業から三次産業まで行う六次産業化のありかたについて、水産庁防災漁村課中

村課長補佐ならびに高知大学受田副学長から説明がなされた。地域資源に付加価値を付ける事で漁村外から人と金が入ってくる仕組みや、漁村内で加工食品を作り村外に販売するには村内への人と金の出入りを抑制してしまうリスクを生じるが、これに対しブログ等での情報発信を頻繁に行い多数の観光客の御用聞き、受注システムを確立することで雇用を創出し、地域資源を売り出す機会を得るといった内容であった。

また、国（厚労省労働局）の補助事業で雇用創造事業についての説明があり、今後、これを利用してはどうかとの提案があった。

### 5) シャコガイ養殖、放流の観光利用

平成23年2月15日に小浜島細崎公民館において、水産海洋研究センター石垣支所井上研究員により、シャコガイ放流、養殖の観光利用について研究紹介を行った。また、細崎南側海岸の魚垣周辺において底質等、環境について調べたところ、若干のシルトが見られるが、ヒメジャコの放流には問題ないとのことであったため、現地の漁業者団体の細崎ま〜る新鮮隊の活動の一環としてシャコガイ放流を検討することとした。

平成23年3月22日に、細崎ま〜る新鮮隊によるシャコガイの観光利用の一環として、試験的に小浜島細崎南側の魚垣付近においてヒメジャコの放流を行った。公民館で振興センター普及指導員の鹿熊主幹により放流方法について説明があり、最干潮時に合わせて現場にて放流作業を行った。作業は電動ドリルで岩盤等に穴を開け、泥を洗い流して種苗（殻長10mm）を中に入れ、モジ網のネットピースをかぶせてタッカーで固定するといった方法で行った。当日は新鮮隊のメンバーの他、地元住民あわせて12名ほどで作業を行い、放流方法を覚えていただいた。放流予定数は1,000個であったが、作業途中で雨が激しくなり、ドリルの電力も弱まったため、約700個放流した時点で終了し、残りは4月6日に放流した。

## 6) 加工品開発

地元で時期によりまとまって漁獲される地魚を使ってのたらしあげについて、数回試作を行いほぼ商品としても申し分ないものが完成したが、安定供給や衛生的な加工施設整備の問題が解決していないことから、それまでの間はブルーリズムの体験プログラムの一つとして活用することとした。



第1回 地域戦略協議会



たらしあげ作り体験



定置網漁業についての説明



世界海垣サミットでの発表の様子



水産庁中村補佐による説明



井上研究員によるシャコガイ観光利用の説明



ヒメジャコの試験放流の様子